「看とりの心」を考える

■「看とり」とは、最近では人生の最期（臨死期）における看とりを持って、単に「看とり」と言い表すことが多くなっていますが、もともとは、「病人のそばにいて世話をする」、「死期まで見守る」、「看病する」という、患者を介護する行為そのものを表す言葉でした。

死ぬ、亡くなる―。どこか寂しい響きが伴う言葉を、土佐弁は古くから「満（み）てる」と呼ぶそうです。かけがえのない自分の人生を、満たされて最期を迎えることができるかどうかということを、いつも考えさせられます。

この世に生を受けたものは、いずれ必ず死が訪れます。
極端な言い方になりますが、私たちは「明日死ぬかも知れない」と思って、毎日を生きているかどうか。
メメントモリという言葉があります。死を近くに思え、という意味です。死を近くに思うことが、生を大切に思うことに繋がります。

■てのひらで、「看とりの心」を大切にしていこうとしているのは、終末期の方ばかりが対象という意味ではありません。
「満てるその日まで、生きるを支える」「生きてこられたことを尊重する」ことが、「看とりの心」につながると思っています。
「看とり」と言う捉え方は人それぞれですが、私は、この「看とりの心」を大切にして、この世に看とりの文化を広げようとしておられる先輩方から学び続けていきたいと思っています。

■最後に、緩和ケア病棟に長年勤めていた黒川ナースが、自身の体験をもとに、てのひらの実習に来た看護学生に送ったメッセージを、紹介します。

「私は親切で、よく気が付く、賢い人に世話をしてもらいたい。そういう人なら私のして欲しいと思っていることをわかってくれるだろうし、私が死と向き合うのを、心を込めて支えてくれるだろうと思う」という患者様の言葉を紹介し、「これから看護師として歩む中、終末期の患者様や家族と向き合うこともあると思います。その時必ず一度は悩みます。そんな時はこの患者様の言葉を思い出してみてください。きっと何か温かい気持ちになり、素直な気持ちで向き合えると思います」というメッセージを看護学生に送りました。

このメッセージをもらった学生たちは、困難に直面した時、先輩看護師にもらったメッセージがお守りになることと思います。
私は、このメッセージを書いて伝えようとする気持ちが、「看とりの心」だと思っています。

残暑厳しい中ですが、みなさん、よく頑張ってくれています。ありがとうございます。
今月もお疲れ様でした。

2023年9月8日　　呉 静恵